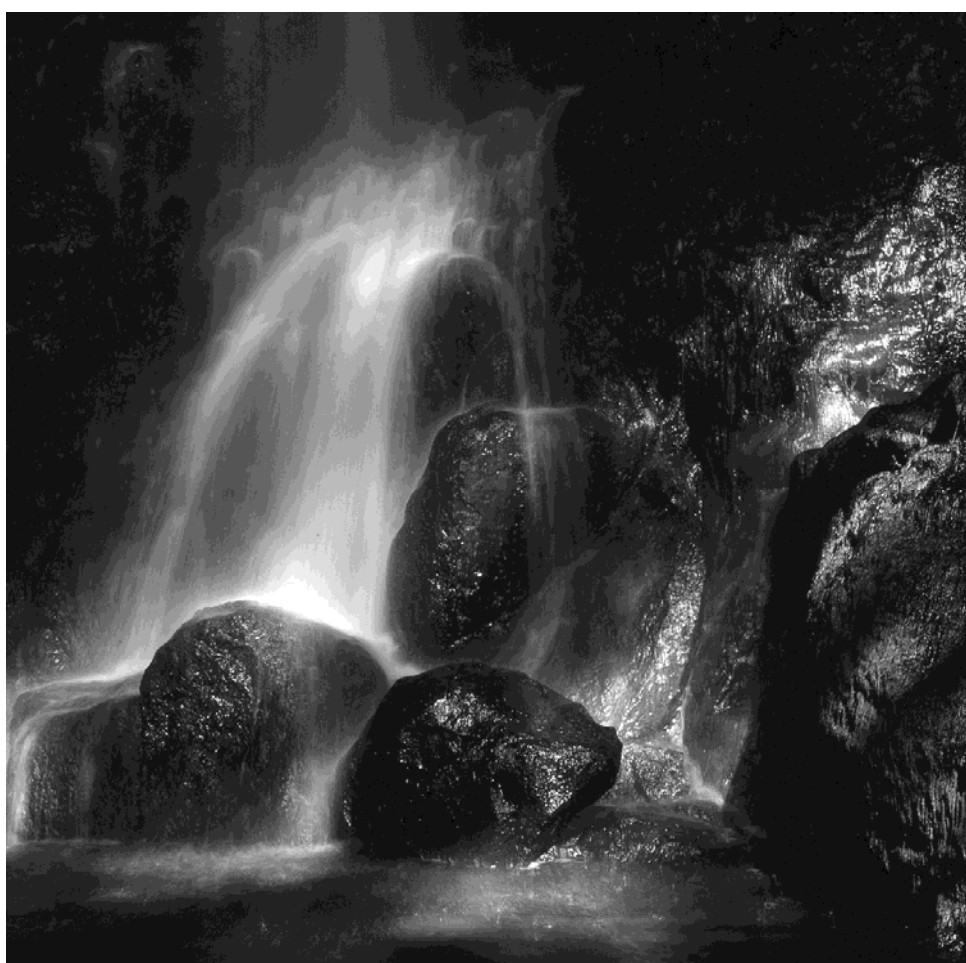


# 第 137 回日耳鼻長崎県地方部会

## 学術講演会 プログラム抄録集



潜竜ヶ滝(佐世保市江迎町)

日時：平成 23 年 12 月 17 日（土）午後 14 時 55 分～

場所：佐世保医師会館（佐世保市）

### 〈ご案内〉

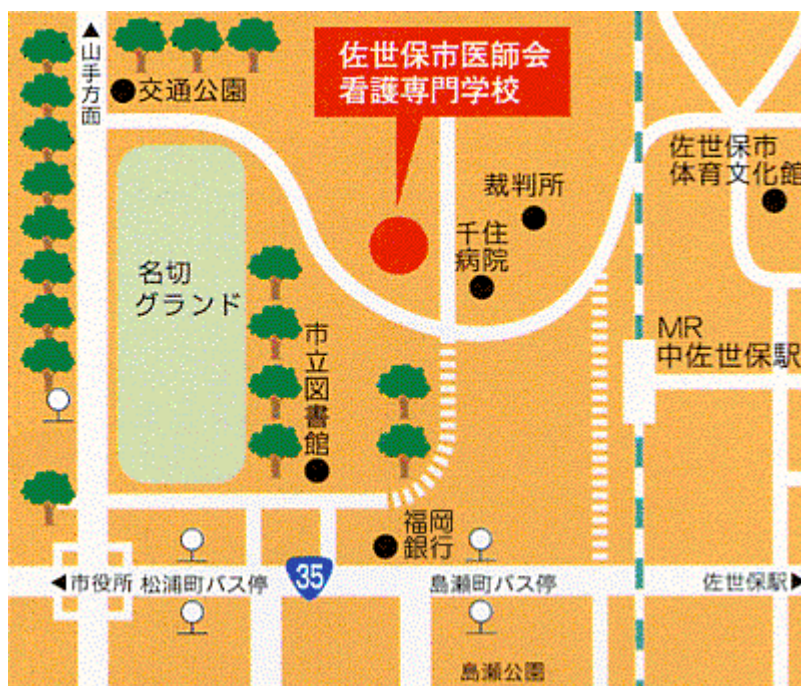
- ◆ 会場は、佐世保医師会館（3階）の大講堂です。  
〒857-0801 佐世保市祇園町 257 番地 Tel0956-22-5900  
(JR 佐世保駅より徒歩 25 分、松浦鉄道中佐世保駅より徒歩で 7 分)
- ◆ 専門医の方は学術集会参加報告書(平成 23 年度用)をご提出下さい。
- ◆ 本会は、長崎県医師会承認生涯教育講座です。

### 〈演者の方へ〉

- ◆ 一般演題の口演時間は 7 分以内、討論は 3 分以内です。時間厳守をお願いします。スクリーンは 1 面でプレゼンテーションには Microsoft Office Power Point 2007 を使用します。Mac 使用の方は Windows ファイルに変換して、文字ずれ・文字化けなど無いことを確認してから CD-R またはフラッシュメモリーでご持参下さい。スライド枚数に制限はありませんが、発表時間を厳守してください。

### 〈抄録原稿の書き方について〉

- ◆ 日耳鼻会報増刊号への掲載はありませんが、事務局への提出は行います。日耳鼻提出用の抄録原稿は本抄録に掲載された内容といたします。変更を希望される場合のみ、学会当日に変更抄録をご提出下さい。なお、抄録原稿の書き方については、日耳鼻会報に記載された「地方部会講演抄録原稿の提出について」をご参考ください。



★会長挨拶 (14:55～15:00)

高橋晴雄(長崎大)

第Ⅰ群 : (15:00～15:40)

座長 穠山直太郎 (長崎大)

1. 残存聴力活用型人工内耳 EAS および人工中耳 VSB 症例について

○道祖尾 弦・佐藤智生・原 稔・穠山直太郎・福田智美・隈上秀高  
高橋晴雄(長崎大)

2. 舌根に生じた壊死性唾液腺化生の1例

○畑地憲輔・吉田晴郎 (嬉野医療)

3. 迷入した中心静脈カテーテル長期留置による深頸部膿瘍・内頸静脈血栓症の一例

○渡邊 毅・宗 謙次・奥 竜太・田中藤信 (長崎医療)

4. 先天性両側後鼻孔閉鎖症の1例

○山口仁平・原 稔・石丸幸太郎・高橋晴雄 (長崎大)  
土居美智子 (同小児科)

第Ⅱ群 : (15:40～16:20)

座長 金子賢一 (長崎大)

5. 頬粘膜下転移で発見された甲状腺オカルト癌例

○前田耕太郎・山口仁平・桂 資泰・石丸幸太郎・金子賢一・高橋晴雄 (長崎大)  
安倍邦子 (同病理部)  
西 秀昭 (佐世保総合)  
陣内進也 (がんセンター東)

6. 非反回下喉頭神経の1例

○奥 竜太・田中藤信・宗 謙次・渡邊 毅 (長崎医療)

7. 上気道狭窄を伴った ATL の一例

○占部有人・岩永 哲・眞田文明 (長崎市民)  
富村沙織・廣瀬寮二 (同皮膚科)  
山村政臣 (同内科)

8. 小児下顎骨肉腫症例の経験

○石丸幸太郎・桂 資泰・高橋晴雄 (長崎大)  
田中克己 (同形成外科)

第Ⅲ群：(16:20～17:00)

座長 大里康雄 (佐世保中央)

9. 蝶形骨洞に発生した schwannoma の 1 例

○安達朝幸・西 秀昭・北岡杏子・平山 彩 (佐世保総合)

10. 眼窩内炎症性偽腫瘍の 1 例

○加瀬敬一・塚崎尚紀 (健保諫早)

11. IgG4 関連唾液腺疾患症例

○宗 謙次・渡邊 毅・奥 竜太・田中藤信 (長崎医療)

12. 舌内および舌骨下に発生した甲状舌管嚢胞例

○西 秀昭・平山 彩・北岡杏子・安達朝幸 (佐世保総合)

★同門会学術奨励賞受賞論文講演 (17:00～17:30)

司会 同門会々長 中島成人 先生

2011 年 松尾 薫 先生 (長崎大)

演題名：Surgical anatomy of the sphenoid sinus on the CT using multiplanar reconstruction technique.

2011 年 道祖尾 弦 先生 (長崎大)

演題名：Binocular and monocular measurements of subjective visual vertical in vestibular loss.

★長崎県耳鼻科病診連携研究会総会 (17:30～17:50)

長崎県耳鼻科病診連携会長 青木眞二  
会計報告 石丸幸太郎

★連絡事項、その他

★閉会

★懇親会 (18:00～19:30)

当日は地方部会終了後、同会場にて 18 時 00 分から懇親会 (無料) を予定いたしております。万障お繰り合わせの上、ご出席ください。

## 1. 残存聴力活用型人工内耳 EAS および人工中耳 VSB 症例について

○道祖尾 弦・佐藤智生・原 稔・穠山直太郎・福田智美・隈上秀高  
高橋晴雄(長崎大)

Med-El 社製の残存聴力活用型人工内耳である EAS(electric acoustic stimulation)および半埋め込み型人工中耳である VSB(Vibrant Soundbridge)は、欧米を中心に既に認可され多数手術症例が施行され、国内では高度医療がまもなく開始される予定である。当科では高度医療に先駆け、それぞれ 1 例ずつ手術を施行し良好な結果が得られたので、手術の適応を含め紹介する。

### 【参考文献】

Colletti V, Soli SD, Carner M, et al : Treatment of mixed hearing losses via implantation of a vibratory transducer on the round window. Int J Audiol. 2006 : 45 ; 600-8

Skarzynski H, Lorens A, Zgoda M, et al : Atraumatic round window deep insertion of cochlear electrodes. Acta Otolaryngol. 2011 : 131 ; 740-9

## 2. 舌根に生じた壊死性唾液腺化生の 1 例

○畑地憲輔・吉田晴郎 (嬉野医療)

壊死性唾液腺化生は、唾液腺組織の一部が壊死に陥り、隣接腺組織の腺房と導管に広汎で著しい扁平上皮化生をきたした状態で、小唾液腺、特に口蓋腺に生じることが多い。扁平上皮癌や粘表皮癌と組織像が類似する点や、化生上皮が唾液腺腫瘍の発生母地となることがあるため、認識すべき病変である。今回我々は、舌根に生じた壊死性唾液腺化生の 1 例を経験したので、文献的考察を加え報告する。

### 【参考文献】

中島順子、他 : 疼痛を主訴とした壊死性唾液腺化生の 1 例. 日口診誌 2011 : 24 ; 104-09

Tomaas Ravn : Adenosquamous carcinoma of larynx associated with necrotizing sialometaplasia - A diagnostic challenge. Auris Nasus Larynx 2009 : 36 ; 721-24

### 3. 迷入した中心静脈カテーテル長期留置による深頸部膿瘍・内頸静脈血栓症の一例

○渡邊 毅・宗 謙次・奥 竜太・田中藤信（長崎医療）

内頸静脈血栓症の原因として、腫瘍や頭頸部感染症に伴うもの、中心静脈カテーテルの長期留置に伴うものなどが報告されている。

今回、右鎖骨下静脈から挿入された中心静脈カテーテルが右内頸静脈に迷入し、約半年の間留置された結果、カテーテル感染による深頸部膿瘍・内頸静脈血栓症を発症し、手術的にカテーテルの抜去・膿瘍の開放をおこなった症例を経験した。

若干の文献的考察を加え報告する。

#### 【参考文献】

松元雪絵、他：中心静脈ポート留置後に発生した内頸静脈血栓性静脈炎の2例  
感染症研究会 2010：28；145-50

### 4. 先天性両側後鼻孔閉鎖症の1例

○山口仁平・原 稔・石丸幸太郎・高橋晴雄（長崎大）  
土居美智子（同小児科）

今回われわれは、膜性の先天性両側後鼻孔閉鎖症に対して、内視鏡下鼻内手術を行い良好に経過した症例を経験したので報告する。症例は、女児。2606gで出生し、直後に呼吸障害に対して経口挿管された。ファイバースコープ、CT所見で後鼻孔が完全に閉鎖していることを確認した。生後2か月、体重3934gの段階で内視鏡下後鼻孔削開術を施行した。現在術後6か月経過し、再開鎖なく経過良好である。

#### 【参考文献】

Hosam ER, Osama AA: A 13-year experience and predictors for success in transnasal endoscopic repair of congenital choanal obliteration. Int J Periatr Otorhinolaryngol 2010：74；737-42

## 5. 頬粘膜下転移で発見された甲状腺オカルト癌例

- 前田耕太郎・山口仁平・桂 資泰・石丸幸太郎・金子賢一・高橋晴雄（長崎大）  
安倍邦子（同病理部）  
西 秀昭（佐世保総合）  
陣内進也（がんセンター東）

症例は68歳女性。2008年1月左頬部腫脹を主訴に当科を受診した。小唾液腺癌と診断し、同年3月腫瘍摘出術を施行した。永久標本で乳頭癌の診断であり、甲状腺癌の遠隔転移が強く疑われた。2011年6月左頸部リンパ節の腫大を認め、同リンパ節の摘出と甲状腺全摘を施行した。病理では、甲状腺左葉に微小乳頭癌を認めた。本症例のように、微小癌でも遠隔転移を認める場合は、進行癌として甲状腺全摘術と放射性ヨード療法を行うべきである。

## 6. 非反回下喉頭神経の1例

- 奥 竜太・田中藤信・宗 謙次・渡邊 毅（長崎医療）

甲状腺癌の患者に対して甲状腺全摘術を行い、非反回下喉頭神経を認めた症例を経験した。

右鎖骨下動脈起始異常に伴い、反回神経が迷走神経より直接分枝する異常であり、通常の手術操作では神経損傷を引き起こす可能性が高くなると考える。今回の症例においても、一時的な右反回神経麻痺が見られたが、術後早期に回復した。今回の症例を参考に、今後同様の症例に遭遇した際に取りべき対応について考察した。

### 【参考文献】

杉野圭三、岡本英樹、他：甲状腺手術における Nonrecurrent inferior laryngeal nerve 確認の重要性. 内分泌外科 1998；15；121-26

## 7. 上気道狭窄を伴った ATL の一例

- 占部有人・岩永 哲・眞田文明（長崎市民）  
富村沙織・廣瀬寮二（同皮膚科）  
山村政臣（同内科）

上気道狭窄を伴った ATL の一例を経験したので、若干の文献的考察を含めて報告する。症例は 83 歳男性。平成 23 年 5 月中旬より発熱・咽頭痛出現。近医で消炎治療行うも改善なく、原因精査の CT で偶然上気道狭窄を認めたため、5 月 24 日当科紹介。喉頭ファイバーで白苔付着を伴う喉頭狭窄を認め、同日気管切開術施行。その後、血液検査で異常リンパ球の増多、抗 HTLV-1 抗体陽性、および全身に散在する皮疹を認め、生検で ATL の診断に至った。

### 【参考文献】

森脇計博、坂田義治、加藤 崇、他：喉頭 ATL 症例. 耳鼻 2002 : 48 ; 323-25  
西幹二郎、熊澤博文、川村茂樹、他：呼吸困難を主症状とした Adult T cell Leukemia(ATL)症例. 耳鼻 1995 : 41 ; 584-87

## 8. 小児下顎骨肉腫症例の経験

- 石丸幸太郎・桂 資泰・高橋晴雄（長崎大）  
田中克己（同形成外科）

頭蓋顔面骨における骨肉腫は遠隔転移が少なく、原発腫瘍の完全切除が重要であるとされている。A 病院口腔外科にて下顎骨肉腫と診断され、B 病院小児科で化学療法後に当科へ手術目的で紹介された。症例は 11 歳女児で術式は下顎亜全摘、片側頸部郭清、遊離腸骨移植再建、気管切開術を選択したが移植骨壊死のため再度遊離腓骨移植術が必要であった。若干の文献的考察を加えて報告する。

### 【参考文献】

Jasnau S, Meyer U, Potratz J, et al :Craniofacial osteosarcoma Experience of the cooperative German-Austrian-Swiss osteosarcoma study group. Oral Oncol 2008 : 44 ; 286-94



## 9. 蝶形骨洞に発生した schwannoma の 1 例

○安達朝幸・西 秀昭・北岡杏子・平山 彩 (佐世保総合)

Schwannoma は有髄神経のシュワン細胞が腫瘍化した神経原性腫瘍であり、耳鼻咽喉科領域は比較的好発部位ではあるが、そのほとんどは聴神経鞘腫であり、鼻・副鼻腔への発生は全体の約 1% と稀である。そのなかでも極めて稀な蝶形骨洞に発生した schwannoma の 1 例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

### 【参考文献】

盛川 宏、田部哲也、中屋宗雄、他：鼻副鼻腔神経鞘腫の 1 症例. 耳喉頭頸 1997: 69; 963-66

## 10. 眼窩内炎症性偽腫瘍の 1 例

○加瀬敬一・塚崎尚紀 (健保諫早)

眼窩内炎症性偽腫瘍は非腫瘍性の慢性炎症で眼窩内の占拠性病変である。今回我々は、副鼻腔炎から波及した眼窩内蜂窩織炎が疑われ、抗生剤点滴、内視鏡下鼻内副鼻腔手術施行したが改善せず、ステロイド投与で再発寛解を繰り返す症例を経験した。確定診断の目的で眼窩内病変の生検により炎症性偽腫瘍と診断する事ができた。若干の文献的考察を加えて報告する。

### 【参考文献】

木村有一、他：上顎洞に発生した炎症性偽腫瘍の 1 症例. 頭頸部外科 2007: 17; 231-35  
井上夕美、他：眼窩内偽腫瘍の 1 例. 日頭顎顔会誌 2005: 21; 39-47

## 11. IgG4 関連唾液腺疾患症例

○宗 謙次・渡邊 毅・奥 竜太・田中藤信（長崎医療）

唾液腺腫脹を来す疾患として、ミクリッツ病やキュットナー腫瘍が知られている。従来ミクリッツ病はシェーグレン症候群の亜型と考えられていたが、現在では新たな疾患概念である IgG4 関連疾患の一部と考えられている。IgG4 関連疾患とは、血清 IgG4 高値と病変への IgG4 陽性形質細胞浸潤を特徴とし、全身諸臓器に結節や肥厚性病変を認める原因不明の疾患である。

自験例とともに IgG4 関連唾液腺疾患について報告する。

### 【参考文献】

Yamamoto M, Takahashi H, Ohara M, et al : A new conceptualization for Mikulicz' s disease as an IgG4-related plasmacytic disease. Mod Rheumatol 2006 ; 16 ; 335-40

今野昭義、伊藤永子、岡本美孝 : Sjögren 症候群, Mikulicz 病およびその周辺疾患をめぐる問題点. 唾液腺シンポジウム 1984 : 25 ; 1-33

## 12. 舌内および舌骨下に発生した甲状舌管嚢胞例

○西 秀昭・平山 彩・北岡杏子・安達朝幸（佐世保総合）

甲状舌管嚢胞は正中頸嚢胞とも呼ばれ、胎生期における甲状舌管の遺残組織に由来する先天性嚢胞である。解剖学的には、舌盲孔から胸骨上窩にかけてのあらゆる部位に発生するとされているが、その好発部位は舌骨下であり、舌内に発生することはまれとされている。

今回我々は、舌内及び舌骨下に生じた甲状舌管嚢胞の 1 例を経験したので、文献的考察を加え報告する。

### 【参考文献】

篠原かおる、他 : 舌内甲状舌管嚢胞例. 耳鼻臨床 1999 : 92 ; 263-67

同門会学術奨励賞受賞論文講演

松尾 薫 先生 (長崎大)

演題名 : Surgical anatomy of the sphenoid sinus on the CT using multiplanar reconstruction technique.

雑誌名 : Otolaryngology–Head and Neck Surgery. 2008;138:182-86

抄録 :

**OBJECTIVE:** To clarify the three-dimensional anatomical features of the sphenoid sinus and its surrounding structures as are relevant to performing an endoscopic sphenoidotomy.

**METHODS:** Various dimensions of 224 CT images of the sphenoid sinus and surrounding structures from 122 Japanese adult patients were measured using the multiplanar reconstruction technique.

**RESULTS:** The mean distance from the nasal sill to the sphenoid ostium was nearly 66 mm, and that from the sphenoid ostium to the posterior wall of the sphenoid sinus was nearly 14 mm. The angles from the sphenoid ostium to both the carotid artery and the optic canal varied among the patients. The sphenoid ostium was located at almost the vertical midpoint of the anterior wall of the sphenoid sinus.

**CONCLUSION:** The present study provides anatomical information about the sphenoid sinus and surrounding structures that is essential for avoiding complications in performing an endoscopic sphenoidotomy.

道祖尾 弦 先生 (長崎大)

演題名 : Binocular and monocular measurements of subjective visual vertical in vestibular loss.

雑誌名 : Eur Arch Otorhinolaryngol. 2011 : Mar 29. [Epub ahead of print]

抄録 :

The objective of this study was to investigate the possibility to omit the time-consuming monocular vision measurement in the subjective visual vertical (SVV) test by demonstrating that there is no difference in the results between binocular and monocular measurements. Thirty-one patients with unilateral vestibular schwannoma and 20 normal subjects as controls were involved. Both binocular and monocular measurements of SVV were performed. The main outcome of this study was the difference in the results of SVV between binocular and monocular measurements. There were no significant differences in the tilts of the SVV between binocular and monocular measurements in vestibular schwannoma patients as well as in the controls. Abnormal tilts of SVV may be evaluated precisely only by binocular vision instead of monocular vision.